

ほおき 朴ノ木



1 集落の概要

(1) 地名の由来

「朴坂村（現関川村）は、『^{ほうさか}甕坂^{なま}』が訛って『^{ほうさか}ほうさか』になった。または、ホウノキにちなむものか」と『地名辞典』にある。当町の「朴ノ木村」の由来もそれと同じで、開村のころにホウノキがたくさんあった（自然地名）ことからきているとされている。また、そのホウノキを炭焼き用に利用した（利用地名）ことによると考えられる。

(2) 集落の形成

史料として「朴木村」の名称が記されているのは、慶長2（1597）年に描かれた「越後

国郡絵図」（写真3-113）上である。

この絵図では、「狩野弥三郎分、朴ノ木村中、本納（年貢）2石2斗5升 縄ノ高（取高）11石4斗6合 家3軒11人」とある。

伝説では、朴ノ木村の先祖は平家^{おちうど}の落人で、信州から牧村の峠を越え小字「鍋割」「ドウの沢」の谷を経てきたといわれている。そのすぐ下に「入朴ノ木」という小字がある。ここを朴ノ木村の入り口という意味に取れば、ここが朴ノ木集落発祥の地であると思料できる。また、安塚町古文書愛好会刊『安塚・朴木村の歴史』（以後、「小山家文書」と記す）には、長野県飯山市や大島村大字板山の小山一族との関係にかかわる伝承が載っているが、これらを証明する史料はない。



写真3-113 「慶長2年越後国郡絵図」ほうの
木村 (米沢市 上杉博物館蔵)

「小山家文書」によれば、文禄4（1595）年検地以後の朴ノ木の村勢は次のとおりである。

「天和元（1681）^{とり}酉年11月高田領山五十公^{やまい ぎみの}郷朴木村酉御成箇割付之事」の村高は、22石8斗5升であり、約90年の間に約2倍に達している。翌2年からの検地による成績は、30石8斗7升6合とあり、安永9（1780）年の新田検地では37石7斗9升8合に、さらに大蔵省蔵本「明治元（1868）年旧領高収調書」を基に『頸城郡誌稿』上巻で補正したものとよると、江戸時代末期には69石1斗1升4合にまで石高が増え、新田開発に精励した人々の姿がうかがえる。また、天保6（1835）年の「^{とうましゅうもんになべつおんあらためちよう}当年宗門人別御改帳」によれば、「家数67軒^{のこらずたかもち}不残高持」とあることから、全戸が石高持ちであったことがわかる。天保4年から4年間続いた大飢饉の中、「残らず高持ち」は他に類を見ない珍しいことである。朴木村の人々の暮らし向きが豊かであったのは、どのような仕掛けがあったか解明を期待する。

(3) 戸籍と人口の推移

「越後国郡絵図」に見られる戸数は、年貢を納めている家や本家の数であって、集落全体の数ではない。このほかにも、分家や「名

子」あるいは「なんご」と呼ばれる主家に^{れい}隷属し、専ら耕作や労役に従事する家もあった。史料によれば、寛政10（1798）年の「朴木村差出明細帳」には「家数56軒、^{そうにんすうあわせて}惣人数合371人」の大集落になっている。以後、分家や名子の独立によって徐々に増え、幕末には70軒台に、明治5（1872）年73軒、その後の統計は世帯数になって、大正10（1921）年ごろには78世帯を数えている。注目すべきことは、天保13（1842）年の村極め文書である。それには「近年、分家の独立が多くなり戸数が増えた。もともと耕地が少ない村なので、村全体の生活が苦しくなる。そこで、一同相談の上、現在の家限りとして、以後、分家を出さないことにする」とある。その際、戸主72人が署名している。以後、明治5年に1軒だけの増加にとどまっている事実がある。昭和30（1955）年以後の高度経済成長社会がもたらした、過疎化による現在までの人口構成は、表3-25のとおりである。

表3-25 戸数と人口の推移

年 号	西 暦	戸 数(戸)	人 口(人)	石 高 等
慶長2	1597	3	11	縄高11
天和2	1682	4		
天保8	1837	69	464	
明治5	1872	73		
明治22	1889	72	460	
昭和12	1937	64	500	
昭和30	1955	67	399	
平成12	2000	22	63	
平成15	2003	20	54	

(4) 地理的条件

町の南西部、標高360～460mに位置し、「安塚の軽井沢」といわれ、夏季の気温が2℃程度ふもとより低い。東に長倉・板木・追倉・薬師等600～700mの山塊、南から西にも500～600mの尾根が連なっている。この両尾根

から流れ出る清水を集めた朴ノ木川が北へと流れ下っている。住居は、東斜面のわずかな平坦地を利用して棚田状に点在している。人口の推移でも触れたが、限られた土地を最大限に活用して田畑にし、転用不能地は、漆や薪用の山として管理してきた。朴ノ木には、明治のころまでは、たくさんのトキ（鴉、^と朱鷺^き）が棲んでいたと伝えられている。雪深い当地では春から秋まで子育てをし、冬季には積雪の少ない海岸部で越冬したものであろう。また、今では上越教育大学近辺がカラスの「ねぐら」となっているが、昭和30年代ごろまでは、当地が「ねぐら」の山里でもあった。このように、当地は、トキが生息するのに適したえさが豊富な環境であったこと、カラスが安心して休息できる安寧の地であったことをうかがい知ることができる（トキやカラスの「ねぐら」については、自然編第3章第2節鳥類参照）。今でも湧水地が多くあり、サワガニやヘタッコ（サンショウウオ）、アブラバヤなどが生息している。

また、この辺りには^{じじいし}爺石、^{ばばいし}婆石伝承がある。この石は^{ぎょうかいがん}凝灰岩という砂岩である。地質学では東西の尾根の地下では広くつながっていると考えられる。朴ノ木川やその支流は、この砂岩と赤味を帯びた泥板岩がほとんどであ



写真3-114 菅沼桑園跡から望む「朴ノ木」集落

るが、^{けいかぼく}珪化木やクジラ類の骨化石などが出ることもある。また、当地も地すべり地帯であり、砂防堰堤が幾段にも施されている。川の水位より高い所の水田は、湧水や雪解け水をためた堤（溜池）の水で管理されており、^{かん}旱魃^{ばつ}などの自然災害を被りやすい。

(5) 道路と交通

朴ノ木の道路の歴史を裏付ける史料は乏しいが、『東頸城郡誌』の「慶長式年東頸城郡西部想像地図」には、「安塚→石橋→芹田→こくろ→桐越→菅沼→ほうの木→ふすの」道が、「東頸城郡（享保時代）図」には、「朴ノ木→菅沼→ヨシ坪→七森→…」道が載っている。その後は、明治34年度から10カ年計画をもって道路改修が進められた。それには、川辺線「朴ノ木→高尾→岩神→小川→宮口」、小川線「朴ノ木→小川→国川→宮口」、沼木線「川辺村字津俣ヨリ沼木ヲ経テ小切戸村切越ニ至ル」の3線がある。その中でも小川線は^{うろつんね}小字横道から峰を越し、牧村の雨露峰を下って中条・小川を経て落田に出る生活道路として頻繁に利用されていた。昭和35年ごろまでは、縄・小豆・大豆・箕・^み籠^{かご}などを売りに行き、反物や日用品を買って半日で往復したという。和田に下るよりも近く、店も品物もたくさんあって値も安かったという。現在ではほとんど利用しないが、沼木小学校があったころには、高尾小学校との交流や大谷山を越えて伏野小学校や菱里小学校との交流に利用していた。

昭和45、46年ころには、農業革命に伴って農道が縦横に網の目のように開削された。特に地すべりの復旧工事と併せ、水田の保全と圃場整備に伴う上用水線と下用水線は^{へいとう}顕著である。上用水線は、牧村の平等や棚田新田に

通じるようになり、下用水線は、朴ノ木川西斜面の耕作地に延びた。しかし、減反政策による放棄水田の増加は、その機能を生かしていない。一方で、きらめき・薬師、朴ノ木・宇津俣への林道が開設したが、山菜採りブームで他域から来た者による山荒らしに戸惑っている。

現在では、国道405号の京塚峰から分岐して町道沼木線が山腹をはうように延びて、菅沼を経て朴ノ木に至り、冬でも自動車での通行が可能である。この道は、昭和45年ごろに開通したが、「南平の抜け」で数年間、車は通れなかった。しかし、この道が開削されるまでの旧道は、切越から字水木に出、菅沼集落を経て元沼木小学校北側下に通じ、急坂でカーブも多く、特に冬場の通行に難渋した。昭和50年ごろに通称「愛の七曲」道が開削され現在に至っている。しかし、今でも急勾配のうえ急カーブの連続で慎重な運転が要求される。急がば回れで、町道沼木線を利用した方が安全である。公的交通機関は、町営のスクールバスと東頸バスが運行している。車社会の現在では自家用車による通勤が可能なので不自由はない。

2 宗教と信仰

朴ノ木の神社は「神明社」で、明治時代の神社統合政策によって、諏訪神社が合祀された。天照大神・誉田別尊・建御名方命が祭神である。神明社は、伊勢信仰（三重県伊勢市にある皇大神宮と豊受大神宮）の発展から、全国的に数多く勧請されている。社殿はなく御神体は石の祠である。平成14（2002）年に写真3-115のように台座が新調された。春祭りの4月28日午後2時から、和田の高野宮司によるお祓いを毎年行っている。



写真3-115 改装成った「神明社」

五穀豊穡、無病息災などを願う「塞の神」行事は、昔は2カ所で行っていたが、今は林向こうの近く1カ所のみとなった。藁と作り手が少なくなっていまい、大きなものができなくなって残念である。

徳川幕府は支配強化政策の一つに「宗門人別改」を実施した。これは、キリシタン禁制による宗教統制と個人調査を徹底したものである。これに伴い庶民の婚姻・旅行・移住・就職等、生活に異動がある場合には、檀那寺や村役人の証明が必要となった。そのため庶民は、どこかの寺の檀家として所属しなければならなかった。こうして寺檀関係、寺請



写真3-116 牧村との境(峰)の「小丸山御旧跡遥拝碑」の拓本

(浦川原村 金子正彰提供)

制度が確立した。「小山家文書」に残されている文化4（1807）年の「改帳」には、「家数59軒、人数459人」とある。そのうち、「浄土真宗363人福浄寺旦那、浄土真宗96人専敬寺旦那」とある。宗旨に関していえば、家単位でなく個人別になっているところが本質的である。檀那寺ごとの人数は前記のとおりであるが、ちなみに戸数を見ると福浄寺旦那が

47軒、専敬寺旦那が10軒である。文久2（1862）年の「改帳」では、福浄寺旦那が55軒、専敬寺旦那が14軒となっている。

小丸山御旧跡とは、現上越市本願寺派国府別院のことである。遠く直江津まで行けない信仰者が、ここから親鸞聖人の流罪時の住居方向に手を合わせたのである。当町には、船倉と菖蒲の境にも遥拝碑が建っている。